



## 2 社会参加をととした 高齢者の学び

—自己・他者・地域への認識の広がり—

三浦 知陽

＜神戸大学ウェルビーイング先端研究センター学術研究員＞

### 1

#### はじめに

2023年にWHO<sup>1)</sup>が発表した健康寿命ランキングで、日本は74.1歳と世界トップである。世界一長い高齢期を元気に過ごせることは喜ばしい。一方で、この長い高齢期をいかに豊かに過ごすかは、個人のみならず超高齢社会における社会全体の課題でもある。

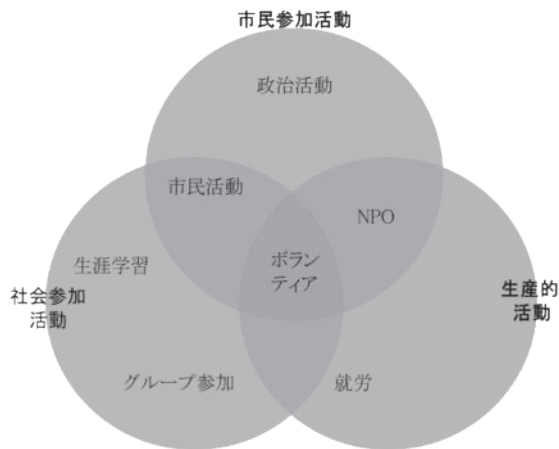
WHOは、高齢期の豊かさを高めることを「アクティブエイジング」と呼び、高齢者が心身ともに健康で、家族だけでなく友人や地域におけるつながりをもつことの重要性を指摘している。そして、その実現手段の1つとして社会参加を位置づけている。近年の個人化による家族の希薄化、核家族化、一人暮らし高齢者の増加を背景に、高齢者の社会参加の必要性がますます高まると指摘している。<sup>3)</sup>

### 2

#### 高齢者の社会参加の変化

現在、高齢者の社会参加率は63.2%である。活動内容としては、健康維持のための活動やスポーツへの参加が最も多く、次いで趣味の活動、地域行事への参加が続く。<sup>4)</sup>これまで老年学では、高齢者の社会参加を「家の外で行うグループ活動」として一括りに扱うことが多かった。しかし近年、高齢者の社会参加の形態は多様化している。年金受給開始年齢の引き上げや定年制度の廃止により、65歳を過ぎても就業を継続する高齢者や起業する高齢者が増加している。<sup>5)</sup>また、自治体が主催する高齢者大学などの生涯学習施設、老人クラブ、地域活動に加え、民間主催の高齢者向けイベントなど、社会とのつながり方の選択肢も拡大しており、高齢者の社会参加は従来の枠組みを超

図1 社会参加とその類似概念（片桐，2017）



えて変化しつつある。

片桐<sup>3)</sup>は、現代の高齢者と社会とのつながり方の変化を捉え、「社会参画」という視点から高齢者の活動を3つに分類した（図1）。第一は、趣味や学習等のグループ活動への参加である「社会参加活動」、第二は、就労等の「生産的活動」で「有償か無償かに関わらず社会に役立つ財を作り出す活動」、第三は、政治参加等の「市民が果たすべき活動」である「市民参加活動」である。

特に生産的活動の1つである就労は、少子高齢化による人材不足への対策として期待されている。実際に高齢者の就労率は増加傾向にあり<sup>6)</sup>、人材不足がさらに深刻化すると予測される日本において、片桐の定義における生産的活動領域の重要性は今後ますます高まると考えられる。

### 3

## 社会参加の効果と学び

一方で、高齢者の社会参加が多様化・拡大するなかにあっても、趣味的充足を重視する活動は、高齢者自身から引き続き高い関心を集めている<sup>4)</sup>。こうした活動の1つとして、学習活動への参加も多く、個人で参加する単発のセミナー等も含めた学習の経験者は、60歳以上で55%、70歳以上で42.5%と、高齢者の半数近くに上る<sup>6)</sup>。堀<sup>7)</sup>は、学習活動はそれ自体が社会参加の一形態として捉えられるだけでなく、他の社会参加活動のきっかけや手段となることを指摘している。

社会参加の効果については、健康増進や生きがいの創出、地域とのつながりという効果が報告されている<sup>8)</sup>。また高齢期の学習活動への参加は、認知機能の低下を抑制さ

せることがわかっている<sup>9)</sup>。

高齢者の社会参加における学習については、学習活動への参加以外に、ボランティア活動等の学習を目的としない活動においても学習の効果が期待できることが指摘されている<sup>3)</sup>。片桐は、高齢期の社会参加には現役時代とは異なる平等規範やコミュニケーションスキルが必要であり、これらの能力は活動への参加を通して学習可能であると指摘している。

こうした活動を通じた学習を理論的に捉えるために、Jarvis<sup>10)</sup>の学習観が有用である。Jarvisは学習を、経験や態度、価値などへ変換される変化のプロセスと定義している。

Jarvisはさらに、これまでの経験で当たり前だと思っていたことが新しい経験では当たり前ではなくなった場合に学習が生じるとしている<sup>11)</sup>。つまり、新しい経験が既存の経験を土台として学習を促すのである。

特に高齢者にとって、経験を通した学習は効果的である可能性が高い。Knowles<sup>12)</sup>は、個人が人生で得た経験は成人の学習における貴重なリソースになると指摘している。経験が豊富な高齢者は、その経験を活かしてより高い学習効果が得られる可能性がある。この前提に立ち、Moody<sup>13)</sup>は、高齢者には情報を得る学習よりも、これまでの経験を強みとして活用できる経験を通した学習機会の推進が必要であると主張した。このように、高齢者の社会参加においては学習施設等で行われる情報や知識中心の学習だけでなく、ボランティア等の実際の活動経験による学習も効果が高いことが期待される。

しかし、これまでの老年学では、社会参加の有無や、健康・幸福感・社会関係の広がりといった効果が主に検討され、活動を通した経験による学習という効果については十分に議論されてこなかった。

本稿では、高齢者の社会参加を学習の場と捉え、活動経験を通して得られる学習効果について、筆者らの研究結果から考察する。なお、以降、社会参加の活動経験を通して得られる学習を「学び」とし、講座受講等による情報や知識の学習と区別して扱う。

## 4

### 社会参加を通してどのような学びが得られるか

本研究では、片桐<sup>3)</sup>の分類に基づき、高齢者の社会参加の3つの形態を検討対象とした。学習活動として高齢者大学を、趣味的活動として絵画教室を、生産的活動として生きがい就労を取り上げた。

**① 調査時期・対象**

| グループ      | 施設                                             | 対象    | 期間                      | 内容                                                                         |
|-----------|------------------------------------------------|-------|-------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| ① 高齢者大学   | 施設A<br>(ボランティア実践コース)                           | 56歳以上 | 2 年<br>90分/週            | 地域の歴史や文化、地域活動の課題等の教養講座（1 年）と地域貢献活動のボランティア参加（2 年）                           |
|           | 施設B（美術・工芸コース）                                  | 57歳以上 | 3 年<br>週 2 日<br>3 時間/日  | 健康、スポーツ、自然、地域の歴史、文化等の一般教養講座と絵画、版画等の美術と陶芸の実習。在学中に地域のボランティアに参加               |
| ③ 絵画教室    | 施設C                                            | 中学生以上 | 週 1 日<br>2 時間/日         | 講師一人に対して受講者 5 人から 7 人のグループで行う絵画教室。<br>学習内容は洋画全般（油、水彩、パステル等）                |
| ② 就労トライアル | 施設D（高齢者複合施設）<br>施設E（介護老人保健施設）<br>施設F（介護老人保健施設） | 60歳以上 | 3 か月<br>週 2 日<br>2 時間/日 | 兵庫県宝塚市主催<br>希望した市内の高齢者施設で、3 か月間のトライアル勤務。業種は、介護助手、直接介護を伴わない配膳下膳、風呂の清掃等の生活介助 |

設：施設D）と第2期2施設（介護老人保健施設：施設E，高齢者複合施設：施設F）であった。

調査協力者は60歳から80歳の男女22人（高齢者大学6人，絵画教室6人，就労トリアル10人）。

インタビュー内容は、活動中に感じたことや変化した行動、考え方の変化等についてであった。

## ② 分析方法 ●●●●●●●●●●●●●●●●

分析は、Jarvis<sup>10)</sup>の定義に倣い、調査協力者から語られた発言について、「活動をと  
おした認識と考え方の変化」を分析テーマとして活動経験をとおした学びの検討を  
行った。

まず、調査協力者のIDを、高齢者大学をK、絵画教室をP、就労トライアルをSで示し、施設をAからFで示した。協力者個別番号は施設ごとに1から通し番号を付した(表2)。

分析に際しては、佐藤<sup>14)</sup>を参照し、協力者の発言から一定の意味のまとまりに従ってコーディングを行った。その後、[概念]の検討を行い、コード・マトリックスを作

表2 調査協力者の概要

| 活動団体    | 施設  | ID  | 性別 | 年齢  | 配偶者 | 最終学歴 | 参加期間 | 概要                                                                                      |
|---------|-----|-----|----|-----|-----|------|------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 高齢者大学   | 施設A | KA1 | 男  | 60代 | 有   | 大学   | 2年   | 平均年齢：67.5歳<br>(SD=4.46, 最小64歳, 最大75歳)<br>社会参加経験：4人が、定年退職して初めての社会活動への参加。1人がスポーツ教室にも参加。   |
|         |     | KA2 | 女  | 70代 | 無*  | 大学   |      |                                                                                         |
|         |     | KA3 | 男  | 60代 | 有   | 大学   |      |                                                                                         |
|         |     | KA4 | 女  | 60代 | 無   | 大学   |      |                                                                                         |
|         | 施設B | KB1 | 男  | 70代 | 有   | 高専   | 3年   |                                                                                         |
|         |     | KB2 | 男  | 60代 | 有   | 大学   | 3年   |                                                                                         |
| 絵画教室    | 施設C | PC1 | 男  | 60代 | 有   | 大学   | 12年  | 平均年齢：70.7歳<br>(SD=4.72, 最小65歳, 最大76歳)<br>社会参加経験：他の趣味活動参加3人, 宗教活動参加一人                    |
|         |     | PC2 | 女  | 70代 | 有   | 短大   | 17年  |                                                                                         |
|         |     | PC3 | 女  | 60代 | 無*  | 短大   | 15年  |                                                                                         |
|         |     | PC4 | 女  | 70代 | 無*  | 短大   | 16年  |                                                                                         |
|         |     | PC5 | 女  | 70代 | 有   | 大学   | 15年  |                                                                                         |
|         |     | PC6 | 女  | 60代 | 無*  | 大学   | 13年  |                                                                                         |
| 就労トライアル | 施設D | SD1 | 男  | 80代 | 有   | 大学   | 3か月  | 平均年齢：69.4歳<br>(SD=5.32, 最小60歳, 最大80歳)<br>社会参加経験：1人は定年退職後すぐの参加, 他の趣味活動参加は5人, 他の就労団体に参加1人 |
|         |     | SD2 | 男  | 70代 | 有   | 高校   |      |                                                                                         |
|         |     | SD3 | 女  | 60代 | 有   | 大学   |      |                                                                                         |
|         |     | SD4 | 女  | 70代 | 無   | 高校   |      |                                                                                         |
|         |     | SD5 | 女  | 60代 | 無   | 高校   |      |                                                                                         |
|         | 施設E | SE1 | 女  | 60代 | 無*  | 高校   |      |                                                                                         |
|         |     | SF1 | 女  | 60代 | 有   | 高校   |      |                                                                                         |
|         | 施設F | SF2 | 女  | 70代 | 有   | 不明   |      |                                                                                         |
|         |     | SF3 | 女  | 70代 | 有   | 大学   |      |                                                                                         |
|         |     | SF4 | 女  | 60代 | 有   | 短大   |      |                                                                                         |

(＊は死別)

成し〔概念〕の整理を行った。〔概念〕同士の関係から〈カテゴリー〉にまとめ、〈カテゴリー〉間の関係から【コアカテゴリー】にまとめた。

### ③ 活動を通した認識と考え方の変化（活動を通した学び） ● ● ●

分析の結果、13[概念]が抽出された。13[概念]を意味内容からまとめた結果、6〈カテゴリー〉が析出され、最終的に2つの【コアカテゴリー】が析出された（表3）。

まず、2つの【コアカテゴリー】の定義について述べる。

【自己に関する認識】は、自分自身に関する考え方や認識の変化であり、自分自身がこれまで気づいていなかった自分の側面や高齢期になった自分に対する新たな見方や気づきである。

【環境に関する認識】は、活動参加に対する認識の変化であり、高齢者の社会参加に対する価値と捉え方、活動参加によって得られる地域や社会の情報や課題についての認識の変化である。

なお、本分析結果で使用する「環境」とは、調査協力者が参加したグループ活動（高齢者大学、絵画教室、トライアル就労）に関連する学習施設や勤務施設、これらの施設がかかわる地域や社会、また活動で出会う仲間等、活動参加で協力者が活動を通してかかわる要素を指すものとする。

これらの2つの【コアカテゴリー】について、〈カテゴリー〉ごとに分析結果を説明する。発言はイタリック文字で示し、〔 〕は方言等の部分の補足、{ }は逐語録からの筆者の補足である。また、発言後部の（ ）は、発言者と発言者における発言

表3 活動を通した認識と考え方の変化

| 【コアカテゴリー】          | 〈カテゴリー〉                 | 〔概念〕                                                |
|--------------------|-------------------------|-----------------------------------------------------|
| 【自己に関する認識】<br>(35) | 〈今まで気づかなかったニーズ〉<br>(13) | 〔現在のニーズ〕(6) ①貢献へのニーズ<br>②興味関心のニーズ<br>〔未来のニーズ〕(7)    |
|                    | 〈自分自身の価値〉(12)           | 〔新たな自分の発見〕(4)<br>〔自分の成長への気づき〕(8)                    |
|                    | 〈高齢期の変化に対する捉え方〉<br>(10) | 〔年齢の受容〕(3)<br>〔健康に対する認識の変化〕(7)                      |
| 【環境に関する認識】<br>(49) | 〈活動参加の価値〉(15)           | 〔友人・仲間の重要性への気づき〕(5)<br>〔関与の重要性への気づき〕(10)            |
|                    | 〈高齢者の価値〉(18)            | 〔高齢者の強みへの気づき〕(15)<br>〔高齢期に伸びる能力への気づき〕(3)            |
|                    | 〈地域と社会に関する情報〉(18)       | 〔活動団体の実情の把握〕(7)<br>〔社会に対する新たな視点〕(6)<br>〔地域情報の入手〕(5) |

(注 ( )内は発言数)

番号を示す。

## I. コアカテゴリー【自己に関する認識】

自分自身に関する考え方や認識の変化であり、＜今まで気づかなかったニーズ＞＜自分自身の価値＞＜高齢期の変化に対する捉え方＞の3つのカテゴリーを含む。

### ① カテゴリー〈今まで気づかなかったニーズ〉

活動をしていくなかで、参加する前には気づいていなかった他者や社会への貢献、また自分のもっている興味関心に気づいた様子がインタビューの発言から捉えられた。

「3年というても、授業数は少ないですから〔中略〕もうちょっと絵の授業専門的にやってもよかったかな（KB2-4）」

「自分のための家事じゃない、誰かのための家事というのがよい（SD4-7）」

これらの発言は、参加した活動を通じた経験から、満足や不満などの感情を通して、自分ではそれほど意識していなかった①貢献へのニーズと②興味関心のニーズという【現在のニーズ】への気づきについての発言と考えられる。

「続くと思ってなかったけど、自分のなかでこれからこれを趣味としていけるのは、楽しみです（PC1-2）」

「車いす押していてもね、ありがとういうてずうっと言ってるおばあちゃんもいるし、もう行けへん言うたら、頑固の一徹で〔中略〕ああなるほどな、こんな人もいてはるんやなど。そういう頑固なじいやなしね、やっぱりかわいいおじいちゃんになりたいな（KB1-14）」

これらの発言は、これまで考えていなかったこれからの人生の楽しみや老後の理想像への気づきという【未来のニーズ】への気づきに関する発言と捉えられる。

### ② カテゴリー〈自分自身の価値〉

「現役で働いていた時は感じなかった、働くってこんなに楽し〔い〕んやと初めておもいました（SD4-2）」

「私、年寄さんがすきなんだなと（SF1-2）」

これは、これまで気づいていなかった楽しみや好みに気づいたという【新たな自分の発見】と捉えた。

「〔他人の心に構わず入ってくるような〕女性の特長性、もう本当に嫌やったんやけどね、ちょっとましになった。すごくよかったと思う（PC1-4）」

「テレビなんか見てるとすごくより絵の、美術のこととかみててもわかりやすくなった（PC3-3）」

これは、自分自身がネガティブに感じていたことに対する克服や、自分の知識や能

力が伸びたというような「自分の成長への気づき」に関する言及といえる。

これらの言説は、ポジティブな自己の側面に対する発見や気づきであることから、カテゴリーを〈自分自身の価値〉と設定した。

### ③ カテゴリー〈高齢期の変化に対する捉え方〉

定年退職し、高齢者としての自分を受け入れがたかったというこれまでの捉え方から、活動に参加していくなかで高齢者としての自分を受け入れられるようになったという「年齢の受容」が可能となっていた。

「辞める前が2年間、30代の会社におったでしょう。若者と同じ職場にいたから、で、辞めてこっち「高齢者大学」きたら、いきなり、「平均」69歳でしょう。ショックが大きかったね。今考えたらよかったと思うよね。早く慣れて（KA3-5）」

また、活動をはじめるようになって、健康管理への意識が高まり、健康への自信というような「健康に対する認識の変化」が得られたことが捉えられた。

「「高齢の入所者と接することで」健康に気をつけますよね。意識は「中略」前より高まった（SD3-5）」

これらの言説は、高齢期の変化のなかで特に注目される側面である年齢や健康に関する変化であることから、〈高齢期の変化に対する認識の変化〉と命名した。

## Ⅱ. コアカテゴリー【環境に関する認識】

活動参加や活動を取り巻く状況に対する認識の変化であり、〈活動参加の価値〉〈高齢者の価値〉〈地域と社会に関する情報〉の3つのカテゴリーを含む。

### ① カテゴリー〈活動参加の価値〉

活動におけるモチベーションや活動参加の意義を高めるために、仲間の存在が欠かせないということに気づいたという「友人・仲間の重要性への気づき」に関する言及があった。

「モチベーションが保てたのは「中略」3年間同じ部屋で「中略」5人、10人のチームごとに分かれて「中略」苦勞を共にしてきた（KB1-4）」

「人とかかわりもできるし、それで頭の体操にもなるし（PC2-5）」

また、主体性や積極性をもった活動へのかかわり方が、活動の意義を高めるということに気づいたという「関与の重要性への気づき」に関する発言も得られた。

「「座学は」面白いなだけでおわっちゃう。自分がそこに参画しないとね（KA3-1）」

「「現場に入って初めてわかるっていうか、勉強させてもらうことが多い（SD1-11）」

友人や仲間、活動への関与度の大切さに対する気づきは、活動への参加が仲間や関

与度によって、さらに意味のあるものになるという価値の変化であると捉えられることから、〈活動参加の価値〉と設定した。

## ② カテゴリー〈高齢者の価値〉

高齢者という存在がグループに参加する際にマイナスではなく、むしろプラスになるということに気づいたという〔高齢者の強みへの気づき〕や、加齢に伴って伸び続けている能力の認知という〔高齢期に伸びる能力への気づき〕に関する言及があった。

「若いときは、時間にも振り回されるし、仕事にも振り回される {中略} 70歳になると、一歩も二歩も引いて自分もみられるし、世の中もみられるしってなるから、そういうのが、これから高齢者が働くのによい面じゃないかと思います (SD4-3)」

「{高齢期は} 年々物をみたら深く、深くみられる。やっぱり、年とともにね。いろんなものが (PC4-4)」

これらの発言の特徴的な点は、自分が高齢期に得た変化を、一般的な高齢者の特徴として捉え、客観性のある言葉で語ったことである。これらの語りからは、活動の参加において、高齢者という存在にプラスの側面があることへの客観的な気づきと捉えられることから、〈高齢者の価値〉と設定した。

## ③ カテゴリー〈地域と社会に関する情報〉

活動に参加することで、活動団体や地域に関するこれまで知らなかった実態がわかったという〔活動団体の実情の把握〕や、これまで意識していなかったことに対して社会的関心が芽生えたという〔社会に対する新たな視点〕が得られたことが語られた。

「いろんなノウハウをね、グループ活動なんか教えてもらったんだけど、なかなかそれを実践するところが {自分の地域に} ないわけ (KA2-2)」

「今までは {高齢者施設での虐待について} 新聞読んだりテレビみたり、そうやねんと思うだけ。やる人は悪いことやけど、なんか落ち度が他にあったんかなとか思うようになりましたね (SD1-9)」

他に、これまで自分一人では収集できていなかった地域の情報が、活動への参加がきっかけで得られたという〔地域情報の入手〕に関する発言があった。

「{やりたいと思ってた} 横笛教室を教えてもらった (KB2-6)」

「教会のバザーを教えてもらった (PC2-6)」

これらの言説は、これまで自分が知っていた団体や地域、社会の認識に、活動参加によって新たな情報が追加されたり、新たな認識が得られたりしたことがうかがえる。

よって〈地域と社会に関する情報の獲得〉と名づけた。

これまでの分析から、協力者は活動経験を異なる視点から捉え直し、自分自身のニーズ、高齢者の強み、地域課題といった新たな認識を得ていることが明らかになった。しかし、こうした学びは活動の一時点でのみ生じるのだろうか。活動の継続は学びにどのような影響を及ぼすのだろうか。次節で、時間軸を考慮した分析結果を示す。

## 5

### 個人の学びから地域・社会に対する学びへ（活動継続による学び）

本節では、活動の継続による学びの変化を捉えるため、調査対象者ごとに学びに関する発言を時系列で整理した。分析の結果、1つの学びが次の学びを促進する連鎖的なプロセスが明らかになった。典型的な例を以下で示す。なお、文中の「」はインタビューでの発言を示す。

SD1さんは、介護施設での生きがい就労に参加していた。仕事を始めて介護施設の人材不足という課題を目の当たりにしたことで、これまであまり興味をもっていなかった介護業界の人材不足問題について学びを得た。

この学びは、その後の認識の変化につながった。介護施設での高齢者虐待のニュースを新聞で読んだ際、SD1さんは虐待した個人だけでなく、その人が働いていた介護施設に何か問題があるのではないかと考えるようになった。つまり、個別の事件の背後にある、介護施設全体が抱える構造的な問題を意識するようになった。

さらに、介護現場の大変さを理解したことは、地域課題に対する認識の変化ももたらした。SD1さんの地域では、介護施設の送迎マイクロバスが住宅街で交通の妨げになることが課題となっていた。これまでSD1さんは「福祉が社会の邪魔をしている」と腹を立てていたが、介護の実情を理解した後は「お年寄りやし時間がかかるからしゃあない」と容認する姿勢に変わった。

こうした認識の変化は、態度の変化にもつながった。SD1さんは、自治会の集まりで介護施設の送迎車の問題について自分の考えを述べようと考えようになり、地域課題に主体的に関与しようとする姿勢をみせるようになった。

このようにSD1さんのケースでは、自分の勤める介護施設の小さな範囲の課題に関する学びから、地域や社会というより広い世界の認識の変化へと広がっていった様子が読みとれる好例である（図2）。

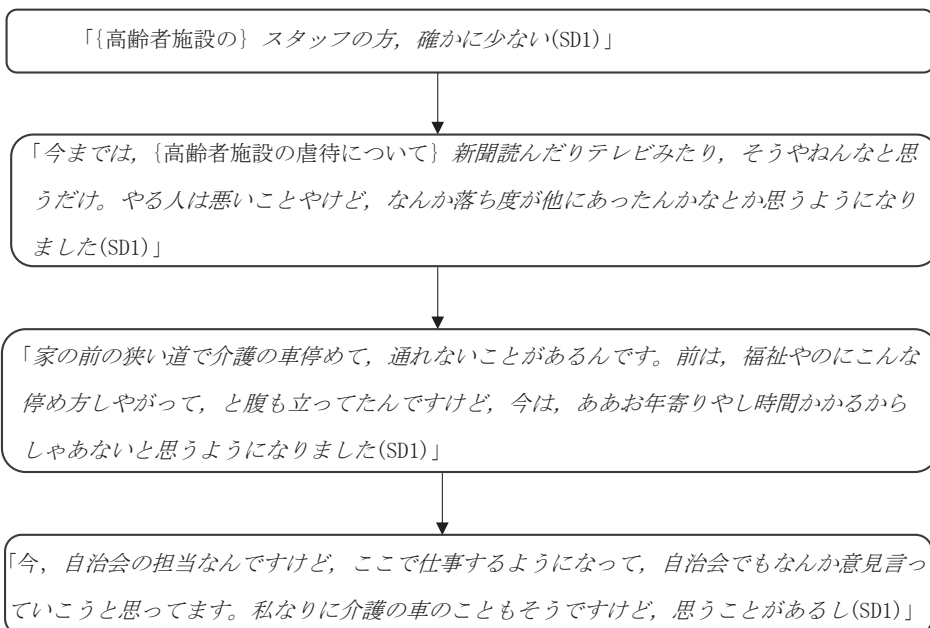
他のエピソードでは、KA1さんは、高齢者大学で同じ班になった年上の人から、パソコンを教えてといわれたことをきっかけに、「(自分に)何ができるんや」といっ

た自分自身の認識に悩んでいたが、自分が他の人よりパソコンの知識があることに気づき、「俺、(人より)パソコンできるんや」と自分に関する認識が変化したというエピソードが語られた。

KA1さんは理系の大学院出身で、定年までパソコンを使う仕事に従事していた。会社の仲間は皆パソコンに精通していたため、自分が特別得意だと思ったことはなかった。そのため、退職後にボランティアを勧められても「何をしたらよいか、何がいったいできるのかわからなかった。何もできない」と、自分には貢献できる経験やスキルがないことにショックを受けた。しかし、高齢者大学のカリキュラムでパソコン教室のボランティアを始めたことが転機となった。パソコンを全く知らない高齢者が非常に多いことに驚き、「パソコンのことわからないから、いっぱいオプションを申し込まされた。これはあかんと思いましたね」と、不必要なインターネットオプションを契約させられている高齢者世帯の実態を知り、KA1さんは高齢者が抱える課題に対する認識を深めたことを語った。この経験から、KA1さんは居住地域でもパソコン教室のボランティアを始めるようになった。活動を通じて、自分のパソコンの知識が「役に立って満足」という実感を得たことが語られた。

このようにKA1さんのケースは、ボランティア活動を通じて、それまで気づいていなかった「自分の価値」の発見から、「誰かの役に立ちたい」という自分自身のニー

図2 活動継続による学びの広がり



ズへと、自己認識が深化していった過程が読み取れる例である。

これらの事例からは、活動を通じた学びが、活動継続によって段階的に広がり深まっていくことが捉えられる。一つの学びが行動の変化を促し、その行動が自己や社会に対する新たな認識をもたらす。変化した認識はさらに次の行動を引き起こし、それが次の認識の変化へとつながるという循環的プロセスである。

## 6

### おわりに

本研究では、高齢者の社会参加における活動経験を通じた学びのプロセスが明らかになった。分析の結果、学びは一時的なものではなく、活動の継続によって段階的に広がり深まることが示された。

本研究では、個人が活動経験を通じた学びによって、参加団体が抱える課題への理解が社会全体の課題の理解へと広がっていく様子が見出された。片桐<sup>3)</sup>は、個人の社会参加を通じた変化が、個人と社会の双方を変化させ、両者の成熟につながる可能性を指摘している。本研究の結果は、この指摘を支持するものといえる。

この知見は、高齢者の社会参加を支援するうえで重要な示唆を与える。少子化による地域の人材不足が懸念されるなか、地域の活性化や課題解決において元気な高齢者の活躍に対する期待は高まっている。地域課題の解決に向け、地域や社会の問題をテーマにした学習講座の提供も1つの方策である。しかし本研究の結果は、講座受講のような意図的な学習だけでなく、高齢者が自身の人生の豊かさを求めて参加した他の活動においても、継続的な参加を通じて地域課題に関する学びが促進される可能性を示唆している。学習施設等での情報提供だけでなく、実際の活動に継続的な参加を促すことが、自己や他者、地域社会に対する認識の深化につながる。個人化が進む社会において、こうした学びを通じた人・地域とのつながりの形成は、高齢者個人の豊かさのみならず、社会全体にとっても意義があると考えられる。

ただし、本研究には限界もある。個人の認識変化が社会につながる可能性は示されたものの、それが実際に社会に資する具体的な行動のきっかけとなり得るのかについては明らかにできなかった。個人の学びと認識の変化が、地域社会にどのような影響を及ぼすのか、その具体的なメカニズムと効果を検証することが今後の課題である。

## 【謝 辞】

本研究に協力いただいた、兵庫県宝塚市役所の方、介護施設の担当者の方、高齢者大学、絵画教室、「宝塚市健康・生きがい就労トライアル」の参加者の方など多くの方に深く感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費（17H02626）及び前川ヒトづくり財団（MHF2019-A007安里知陽）の助成を受けて実施したものです。

## 【引用文献】

- 1) World Health Organization (WHO) (2023). World health statistics 2021: monitoring health for the SDGs, sustainable development goals. World Health Organization 2021. <https://www.who.int/publications/i/item/9789240027053> (2025.12.7 取得)
- 2) World Health Organization (WHO) (2002). Active ageing: a policy framework. <https://extranet.who.int/agefriendlyworld/wp-content/uploads/2014/06/WHO-Active-Ageing-Framework.pdf> (2025.12.7 取得)
- 3) 片桐恵子 (2017). 「サードエイジ」をどう生きるか シニアと拓く高齢先端社会. 東京大学出版会.
- 4) 内閣府 (2023). 令和5年度版高齢社会白書 [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html) (2025.12.27 取得)
- 5) 内閣府 (2025). 令和7年度版高齢社会白書 [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2025/zenbun/07pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2025/zenbun/07pdf_index.html) (2026.1.4 取得)
- 6) 内閣府 (2021). 令和3年度版高齢社会白書 [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html) (2025.12.27 取得)
- 7) 堀薫夫 (2012). 教育老年学と高齢者学習. 学文社.
- 8) 片桐恵子 (2012). 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会.
- 9) 小長谷陽子, 渡邊智之 & 小長谷正明 (2013). 地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性 社会活動および社会ネットワークを中心として. *Dementia Japan*, (27), 81-91.
- 10) Jarvis, P. (1987). Meaningful and meaningless experience: Towards an analysis of learning from life. *Adult education quarterly*, 37(3), 164-172.
- 11) Jarvis, P. (1995). Adult and continuing education: Theory and practice. Psychology Press.
- 12) Knowles, M. S. (1984). Andragogy in Action. Applying Modern Principles of Adult Education. Jossey Bass.
- 13) Moody, H. R. (1986). Late life learning in the information society. In D. A. Peterson, J. E. Thornton & J. E. Birren (Eds), *Education and aging*. Prentice-Hall. 122-148
- 14) 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法 原理・方法・実践. 新曜社.